

連濁しない和語の一側面

Rules Dampening Rendaku of Japanese Words

次世代教育学部国際教育学科

呂 建輝

RO, Kenki

Department of International Education

Faculty of Education for Future Generations

要旨：和語は基本的に連濁が起こりやすいとされている。しかし、連濁が起こらない和語もある。本稿では、連濁しない和語を中心に考察した。結論として、語構成上「語の並置」によりできた複合語は連濁しにくいことが分かった。「語の並置」とは、複合語の前部要素と後部要素に助詞を入れたり活用形にしたりしても意味に大差が生じない語構成のことである。これに対して、連濁が起こりやすい「修飾関係」は、前部要素、後部要素のもつ意味以上に、さらに語彙の意味が、加わっている場合が多い。

Abstract：It is commonly considered that Rendaku mainly occurs to Japanese words. However, There are also exceptions In this paper, we try to think how they work. We find that Rendaku does not act on Word-Juxtaposition. Word-Juxtaposition is different from modification by Rendaku as well as by construction.

キーワード：連濁, 和語, 語構成, 語の並置, 修飾関係

Keywords：Rendaku, Japanese word, Construction, Word-Juxtaposition, Modification

1. はじめに

連濁は語種による違いが見られ、和語には起こりやすく、漢語・外来語には起こりにくいとされている。一方、和語でありながら連濁が起こらないケースもある。連濁に関する先行研究には、以下のような法則が見られる。

1-1 ライマンの法則

明治初期に地質調査のお雇い外国人で来日したライマン (Benjamin Smith Lyman) が論文を発表し、小倉進平の翻訳・紹介により、広く知られるようになった法則である。いわゆる「後部要素に既に濁音がある場合は連濁が起こらない」という法則である。「はる-かぜ (春風)」「やき-そば」などが連濁しないのは、まさに後部要素に濁音があるからだと考えられる。

1-2 擬声語・擬態語

ライマンは、「チクチク」「フワフワ」といった疊語の類も連濁しないという事象に言及したが、金田一

(1976) はこの事象を「連濁を起こさないものは、そのうちの擬声語・擬態語である」と説明した。名詞による疊語 (ひと-びと (人々)) および動詞による疊語 (かわる-がわる (変る変る)) は、一般的に連濁が起こるからである。

1-3 並列構造

ライマンはさらに、「あちこち」「かれこれ」のように、語の並列によってできた語は連濁しない事象についても言及した。これを中川 (1966) が取り上げた「山川」の例で説明すると、「山の中の川」という修飾関係の場合は「やま-がわ」と連濁が起こる。これに対して、「山と川」という並列関係の場合は「やま-かわ」と連濁が起こらない。

1-4 数量詞

「一通り」「二組」などのように、「ヒト」「フタ」などに続く語彙には連濁が起こらない (中川1966)。これに対して「一つ星」「二つ巴」のように「一つ~」「二つ~」の場合は連濁が起こる。その理由について中川 (1966) は詳しく論じなかったが、数量詞には連

濁が起こらないと考えてよいのだろう。「一通り」「二組」などは「一通り説明する」「二組の学生」などのように、「説明する」「学生」といった語の数量を表しているため連濁が起こらないのである。これに対して「一つ星」「二つ巴」は、他の語の数量を表す用法ではないため、連濁が起こると考えられる。ちなみに、たとえ「ヒト～」「フタ～」の形でも、数量詞（つまり他の語の数量を表す用法）ではない場合は連濁するようになるといえよう（「二子」「二心」など）。

1-5 右枝分かれ構造

「塗り箸入れ」は表す意味により「ヌリハシイレ」と「ヌリバシイレ」という二通りの読み方がある。これは語構成上、前者は「塗り-箸入れ」であるのに対して、後者は「塗り箸-入れ」であるからだ、Otsu (1980) が解釈している。

一方、右枝分かれ構造であるにもかかわらず連濁する語もある。「忘-形見」「羽-二重」などがそうであるが、これらの語の後部要素は複合以前の語の意味を失っているからだという見方がある（鈴木2012）。しかし、同じく複合以前の語の意味が薄れている場合も、「信用-取引」「自動-振込」などのように、連濁が起こらないケースが多い。右枝分かれ構造はどんな複合語に影響を与え、どんな複合語に影響を与えないかについて、まだ検討する余地がある。

このように、和語の非連濁現象には一部規則性のある条件が見られるものの、未だに不明な点も多い。そこで以下2節で、ある程度の規則性を探るべく、連濁しない和語を中心に考察してみる。なお、本稿では後部要素が3拍以上の名詞のみを研究対象とする。動詞や形容詞、および2拍以下の名詞についての考察は別稿に譲る。

2. 語例の収集

調査にあたり、まず和語の語例を収集する。本研究では現代語を研究対象とするため、語例収集に使用する辞書は、現代語が中心の『NHK日本語発音アクセント辞典』（以下NHK辞典）にする。3拍以上の和語をNHK辞典より抽出し、それらを後部要素とする語を同辞書より収集した。但し、1節で述べた「ライマンの法則」「擬声語・擬態語」「並列構造」「数量詞」「右枝分かれ構造」により連濁が起こらなかったと思われる語は収集対象から取り除いた。また、接頭辞

「お～」からなる語（お鉢入れ）や、「の」の介在による連体修飾（緋の袴）の場合も、一般的に連濁が起こらないと思われるため語例の収集対象から除外した。

以上の方法で、計224の後部要素を集めることができ、その詳細は以下のとおりである。

【清音形しか持たない後部要素】(42種)

形（かたち）、曾（かつて）、要（かなめ）、
剃刀（かみそり）、鴟（かもめ）、
絡繰（からくり）、翡翠（かわせみ）、
冠（かんむり）、茸（きのこ）、紅（くれない）、
こちら、こっち、薄（すすき）、堇（すみれ）、
候（そうろう）、兵（つわもの）、
鳥居（とりい）、博士（はかせ）、一重（ひとえ）、
単（ひとえ）、二つ（ふたつ）、ほとり、
隠し（かくし）、括り（くくり）、支え（ささえ）、
躰け（しつけ）、透かし（すかし）、
掬い（すくい）、廃り（すたり）、
澄まし（すまし）、支え（つかえ）、
繕い（つくろい）、突き（つつき）、
摘み（つまみ）、入り（はいり）、
計らい（はからい）、流行り（はやり）、
祓い（はらい）、捻り（ひねり）、
吹かし（ふかし）、更かし（ふかし）、
含み（ふくみ）

【清濁両形をもつ後部要素】(51種)

勝手（かって）、為替（かわせ）、位（くらい）、
境（さかい）、縮緬（ちりめん）、巴（ともえ）、
羽織（はおり）、袴（はかま）、鼯鼠（ひいき）、
一つ（ひとつ）、一人（ひとり）、懐（ふところ）、
篩（ふるい）、埃（ほこり）、仏（ほとけ）、
返し（かえし）、帰り（かえり）、
掛かり（かかり）、重ね（かさね）、
語り（かたり）、変わり（かわり）、
代わり（かわり）、答え（こたえ）、
熟し（こなし）、好み（このみ）、殺し（ころし）、
盛り（さかり）、浚い（さらい）、晒し（さらし）、
座り（すわり）、損ない（そこない）、
揃い（そろい）、倒し（たおし）、
畳み（たたみ）、溜まり（たまり）、
使い（つかい）、遣い（つかい）、作り（つくり）、
伝え（つたえ）、積もり（つもり）、
通し（とおし）、泊まり（とまり）、
端折り（はしより）、走り（はしり）、
放し（はなし）、払い（はらい）、

晴らし (はらし), 開き (ひらき),
拾い (ひろい), 広め (ひろめ),
振る舞い (ふるまい)

【濁音形しか持たない後部要素】(131種)

蛙 (かえる), 頭 (かしら), 柏 (かしわ),
霞 (かすみ), 緋 (かすり), 敵 (かたき),
刀 (かたな), 形見 (かたみ), 鯉 (かつお),
鹿子 (かのこ), 袴 (かみしも), 雷 (かみなり),
芥子 (からし), 烏 (からす), 鰈 (かれい),
瓦 (かわら), 匏 (かんな), 鎖 (くさり),
葉 (くすり), 轡 (くつわ), 車 (くるま),
水 (こおり), 心地 (こち), 心 (こころ),
炬燵 (こたつ), 曆 (こよみ), 衣 (ころも),
魚 (さかな), 桜 (さくら), 侍 (さむらい),
復習 (さらい), 姑/舅 (しゅうと),
虱 (しらみ), 印 (しるし), 台詞 (せりふ),
宝 (たから), 狸 (たぬき), 魂 (たましい),
盥 (たらい), 俵 (たわら), 力 (ちから),
机 (つくえ), 所 (ところ), 年増 (としま),
年寄 (としより), 問屋 (とんや), 秤 (はかり),
鋏 (はさみ), 柱 (はしら), 畑 (はたけ),
話 (はなし), 嘶 (はなし), 咄 (はなし),
林 (はやし), 囃子 (はやし), 光 (ひかり),
庇 (ひさし), 廂 (ひさし), 醬 (ひしお),
額 (ひたい), 日和 (ひより), 平目 (ひらめ),
袋 (ふくろ), ふすま, 二重 (ふたえ),
風呂敷 (ふろしき), 箒 (ほうき),
黒子 (ほくろ), 螢 (ほたる), 抱え (かかえ),
係り (かかり), 懸かり (かかり),
囲い (かこい), 固め (かため), 構え (かまえ),
搦み (からみ), 乾き (かわき),
替わり (かわり), 決まり (きまり),
曇り (くもり), 暮らし (くらし),
包み (くるみ), 拵え (こしらえ),
仕掛け (しかけ), 仕切り (しきり),
仕込み (しこみ), 仕立て (したて),
仕舞い (しまい), 締まり (しまり),
湿り (しめり), 住まい (すまい),
背負い (せおい), 揃え (そろえ),
倒れ (たおれ), 集り (たかり), 巧み (たくみ),
嗜み (たしなみ), 助かり (たすかり),
助け (たすけ), 叩き (たたき), 頼み (たのみ),
試し (ためし), 絶やし (たやし),
便り (たより), 垂らし (たらし),
誑し (たらし), 弛み (たるみ),

尽かし (つかし), 掴み (つかみ),
疲れ (つかれ), 尽くし (つくし),
造り (つくり), 伝い (つたい), 包み (つつみ),
勤め (つとめ), 詰まり (つまり),
通り (とおり), 止まり (とまり),
留まり (とまり), 挟み (はさみ),
叩き (はたき), 働き (はたらき),
離れ (はなれ), 孕み (はらみ), 控え (ひかえ),
浸し (ひたし), 膨れ (ふくれ), 太り (ふとり),
震い (ふるい), 減らし (へらし),
惚け (ほおけ)

以上から、まず連濁する和語の数が圧倒的に多いことがわかる。以下3節では、一部清音形を持つ和語の考察を通して、連濁しない和語の側面を検討してみる。

3. 考察

3-1 「～冠」について

「冠」を後部要素とする語例は以下の通りである。いずれも清音形である。

ウ冠 (うかんむり), ワ冠 (わかんむり),
山冠 (やまかんむり), 竹冠 (たけかんむり)

これらはいずれも漢字の部首を表している。「かんむり」は「かぶり」に由来し、もともと語中に濁音が入っていたため、ライマンの法則により連濁が起らないとも考えられる。しかし、少なくとも部首で使われる場合の「冠」に限っては、管見の限り「～かぶり」と読むことはなく、ライマンの法則により連濁が阻止されたとは考えられにくい。

部首の「かんむり」は、典型的なものとして上掲の「ウかんむり」「ワかんむり」「山かんむり」「竹かんむり」以外にも「穴かんむり」「雨かんむり」「草かんむり」などが挙げられる。「ウかんむり」は、形がウに似たもので「字」「室」の上部がそれである。「ワかんむり」は、形がワに似たもので「冗」「冠」の上部がそれである。同じように「山かんむり」は形が「山」に似たもの、「竹かんむり」は形が「竹」に似たもの、「穴かんむり」は形が「穴」に似たもの、「雨かんむり」は形が「雨」に似たものを指す。「草かんむり」も、「草」の異体字「艸」に似たものを指すと考えれば、同じく部首の字形から由来するものと考えら

れる。つまり、「～かんむり」の前部要素がそのまま部首の形を表しており、語構成上「前部要素＝かんむり（部首）」の関係であると考えられる。

これとは対照的に「包構え（つつみがまえ）」「式構え（しきがまえ）」の「構え」が濁音形で使われる。「～構え」の多くは「前部要素＝構え（部首）」ではないからではないかと考えられる。

3-2 「～巴」について

「～巴」には清音形と濁音形両方ある。その語例は以下の通りである。

清：卍巴（まんじともえ）

濁：三つ巴（みつどもえ）、二つ巴（ふたつどもえ）

「～巴（ともえ）」の状況も3-1で述べた「～かんむり」に非常に似ている。「～巴」の清音語「卍巴（まんじともえ）」は、前部要素「卍」がそのまま「巴」の形を表している。一方、これとは対照的に、濁音語「二つ巴（ふたつどもえ）」「三つ巴（みつどもえ）」の前部要素「二つ」「三つ」はそのまま「巴」の形を表すものではない。

一般的に連濁は、前部要素が後部要素を修飾する、いわゆる修飾関係の場合に起こりやすいと思われる。部首に使われる「～かんむり」および「卍巴」が連濁しないのは、「前接部＝かんむり（部首）」という語構成は修飾関係ではないからだということを示唆しているのではないだろうか。

3-3 「修飾関係」の再検討

1-3で取り上げたように、これまでの連濁研究では「修飾関係」は「並列関係」と相反する言い方だと考えられている。日本語における複合語は「右側主要部規則」（窪蘭1995）に従い、前部要素が後部要素を修飾するのが基本である。しかし並列関係の場合、前部要素が後部要素を修飾していない。そのため、連濁が阻止されたと考えられている。

また、連濁は連体修飾関係における「の」の介在によるものだという説もある（村山1954など）。しかし問題となるのは修飾関係の定義、つまり具体的に「前部要素と後部要素がどのような関係にあるときに連濁し、どのような関係にあるときに連濁しないか」である。3-1で述べた「前接部＝かんむり（部首）」および3-2で述べた「卍＝巴」という語構成が修飾関係ではないとすれば、では修飾関係とは何かを具体的に

記述する必要性が出てくる。

これについて、まず和語複合語と漢語複合語の語構成上の相違点を考えたい。連濁は和語に起こりやすく、漢語に起こりにくい。これは語種の性質上の違いによるものだとされている。一方、語種の性質上の違いにより、和語でできた複合語と漢語でできた複合語の間に、語構成上の違いも見られることがあるのではないだろうか。以下がその代表的な例である。

【漢語】

人気商品（にんきしょうひん）

車間距離（しゃかんきょり）

共同管理（きょうどうかんり）

院内感染（いんないかんせん）

【和語】

赤蛙（あかがえる）

花鯉（はながつお）

口答え（くちごたえ）

親代わり（おやがわり）

以上に挙げた漢語の複合語でも和語の複合語でも、前部要素が後部要素を修飾するものだと一般的に考えられている。しかし語構成上には、大きな違いがある。漢語の場合、「人気商品」「車間距離」「共同管理」「院内感染」は「人気な商品」「車間の距離」「共同での管理」「院内での感染」という意味で、助詞を入れたり活用形にしたりしても大して意味の差は出ない。一方、和語の場合、「赤蛙」はただの「赤い蛙」ではなく、蛙の種類の一つを指している。「花鯉」は「花の鯉」と解釈することができず、鯉節を花のように削って作ったものを指している。「口答え」はただ「口で答える」という意味ではなく、目上の人に逆らって言い返すことを指す。「親代わり」は、ただ「親に代わる」だけではなく、子どもの養育をすることも含意されている。このように、漢語の複合語は、助詞を入れたり活用形にしたりしても意味に大差が生じない場合が多い。これに対して、和語の複合語は、意味の特化が生じたり、特別な意味が含まれたりする場合が多い。

但し、後部要素が和語の複合語も、もし上述した漢語の複合語のように「助詞を入れたり活用形にしたりしても意味に大差が生じない」のであれば、連濁は起こりにくくなるのではないだろうか。本稿で収集した語例のうち、「～冠」「～巴」のほか、以下のような例もそれにあたる。

【形 (かたち)】
 姿形 (すがたかたち), 見目形 (みめかたち),
 顔形 (かおかたち), 髪形 (かみかたち)

【曾 (かつて)】
 いまだかつて

【要 (かなめ)】
 肝心要 (かんじんかなめ)

【剃刀 (かみそり)】
 安全剃刀 (あんぜんかみそり),
 電気かみそり (でんきかみそり)

【茸 (きのこ)】
 毒茸 (どくきのこ)

【こちら】
 あちらこちら

【こっち】
 彼方此方 (あっちこっち),
 其方此方 (そっちこっち)

【博士 (はかせ)】
 物知り博士 (ものしりはかせ)

【勝手 (かって)】
 好き勝手 (すきかって),
 自由勝手 (じゆうかって)

【為替 (かわせ)】¹
 ドル為替 (どるかわせ), 円為替 (えんかわせ),
 外国為替 (がいこくかわせ)

【袴 (はかま)】
 羽織袴 (はおりはかま)

【懐 (ふところ)】
 山懐 (やまふところ)

【篩 (ふるい)】
 灰篩 (はいふるい)

【埃 (ほこり)】
 塵埃 (ちりほこり)

【括り (くくり)】
 首くくり (くびくくり)

【掬い (すくい)】
 泥鰯掬い (どじょうすくい)

【廃り (すたり)】
 はやりすたり

【更かし (ふかし)】
 夜更かし (よふかし)

【帰り (かえり)】
 行き帰り (いきかえり)

【答え (こたえ)】

受け答え (うけこたえ)

【浚い (さらい)】
 ごみ浚い (ごみさらい), 溝浚い (どぶさらい)

【晒し (さらし)】
 恥さらし (はじさらし), 業さらし (ごうさらし)

【溜まり (たまり)】
 水たまり (みずたまり)

【払い (はらい)】
 受け払い (うけはらい)

【拾い (ひろい)】
 くず拾い (くずひろい),
 くり拾い (くりひろい),
 球拾い (たまひろい),
 落ち穂拾い (おちぼひろい)

以上, 例えば「顔形 (かおかたち)」は「顔の形」,
 「電気かみそり」は「電気のかみそり」, 「肝心要」は
 「肝心で要」の意味であると解釈できる。

また, NHK 辞典 掲載 語彙 以外にも, 少納言
 KOTONOHA 現代日本語書き言葉均衡コーパスには
 以下のような例が数多く出現している。複合語かどう
 か一概に言えない例もあるが, 「助詞を入れたり活用
 形にしたりしても意味に大差が生じない」という観点
 では, 連濁が起こらないのも不思議ではないと考えら
 れる。

巨大かかし 右かかと ハゲかつら 駅係員
 資本的関わり 車体傾き 統計的偏り
 東京からかい 風薫る 5 月 天翔ける鳥
 沼囲む樹々 日本人学校通う生徒
 難題抱える中国

以上のような現象から, 少なくとも連濁問題を考える
 際の「修飾関係」は, ただ前部要素と後部要素に何
 らかの関係を有するだけではないことが分かる。前部
 要素と後部要素がそれぞれ示す意味以上に, さらに何
 らかの語彙的意味が加わっているのである。連濁はこ
 のような「修飾関係」をもつ複合語に生じやすいので
 はないだろうか。

他方, 「助詞を入れたり活用形にしたりしても意味
 に大差が生じない」ような複合語は, ただ助詞や活用
 形の省略で句を短くした形であると理解できる。この
 ような関係を, 本稿で仮に「語の並置」と呼ぶ。並列
 関係にある「山川 (やまかわ)」も, 助詞「と」を入
 れて「山と川」の形にしても意味の変化は生じない。

「語の並置」の一種であると考えられる。

また、平野（1974）などが指摘する目的格・主格関係では連濁が起こりにくい事象もこれで説明できる。「ちり取り」「魔法使い」のように前部要素が後部要素の目的格である場合、「ちりをとる（もの）」「魔法を使う（ひと）」だと解釈でき、助詞を入れたり活用形にしたりしても意味の大差は生じないと考えられる。ただ、「もの」「ひと」の意味を表すのは、前部要素と後部要素が結合する際にさらに「もの」「ひと」の意味が加わったのではなく、後部要素の動詞が名詞化に際して「ひと」「もの」を表すことができるようになったと考えた方が妥当なのかもしれない。

3-4 右枝分かれ構造の例外について

本稿で収集した語例のうち、濁音形で、かつ語構成上「右枝分かれ構造」だと考えられる語例は以下のとおりである。

【羽織（はおり）】

袷羽織（あわせばおり）、
ひとえ羽織（ひとえばおり）、
ぶっ裂き羽織（ぶっさきばおり）、
夏羽織（なつばおり）、絵羽織（えばおり）、
茶羽織（ちゃばおり）、陣羽織（じんばおり）

【形見（かたみ）】

忘れ形見（わすれがたみ）

【鹿子（かのこ）】

緋鹿の子（ひがのこ）、京鹿子（きょうがのこ）

【袴（かみしも）】

長袴（なががみしも）、麻袴（あさがみしも）

【雷（かみなり）】

初雷（はつがみなり）

【年寄（としより）】

奥年寄り（おくどしより）、
若年寄り（わかどしより）

【平目（ひらめ）】

舌びらめ（したびらめ）

【二重（ふたえ）】

羽二重（はぶたえ）

【風呂敷（ふるしき）】

大風呂敷（おおふるしき）

【端折り（はしより）】

じんじん端折り（じんじんばしより）

【振る舞い（ふるまい）】

大盤振る舞い（おおばんぶるまい）、
立ち振る舞い（たちぶるまい）

【仕掛け（しかけ）】

絡繰り仕掛け（からくりじかけ）、
ばね仕掛け（ばねじかけ）、
大仕掛け（おおじかけ）、
機械仕掛け（きかいじかけ）、
色仕掛け（いろじかけ）、
電気仕掛け（でんきじかけ）

【仕切り（しきり）】

中仕切り（なかじきり）、間仕切り（まじきり）

【仕込み（しこみ）】

にわか仕込み（にわかじこみ）

【仕立て（したて）】

にわか仕立て（にわかじたて）、
人形仕立て（にんぎょうじたて）、
別仕立て（べつじたて）

【仕舞い（しまい）】

店じまい（みせじまい）、手仕舞（てじまい）、
早じまい（はやじまい）、身じまい（みじまい）

【背負い（せおい）】

一本背負い（いっぽんせおい）

以上の語例を見ると、確かに鈴木（2012）が指摘するように、前部要素と後部要素のももとの意味を失っているものが多い。同時に、語構成の面では、「語の並置」ではない語がほとんどであることも分かる（忘れ形見←？→忘れる形見、羽二重←？→羽が二重、舌びらめ←？→舌のひらめなど）。これも、語構成上「語の並置」によってできた複合語は連濁しにくいことを裏付ける証拠の一つになるだろう。

4. まとめ

本稿では、連濁しない和語について、まずこれまでの先行研究を整理した。次に、NHK辞典より3拍以上の後部要素をもつ名詞を収集し、特に連濁が起こらない和語について考察した。その結果、「語の並置」という語構成の存在に気付いた。「語の並置」とは、複合語の前部要素と後部要素に助詞を入れたり活用形にしたりしても意味に大差が生じない語構成のことである。このような語構成は、一般的な「修飾関係」とは区別すべきもので、連濁が起こりにくいことが、ある程度明らかになった。

ただ、本稿で提案した「語の並置」という観点は、

あくまで語の清濁を左右する要因の一つであると考え
る。それ以外にも、特に「刀（かたな）」「瓦（かわ
ら）」のように濁音語しかもたない後部要素や、「薄
（すすき）」「隠し（かくし）」のように清音語しかも
たない後部要素に興味深い。呂（2018）は漢語「～本
（ほん）」の考察から、ある集合体を類別する役割を
担う「細分性名詞」の存在を確認したが、「刀」「瓦」
「薄」「隠し」などにも同じような用法が見られるかど
うか。また近年、和語「～鳥（とり）」について考察
した山村仁朗（2019）があり、鳥の総称を表す場合は
濁音にならないことが分かった。このような用法は他
の和語にもみられるかどうか。これらの課題を今後の
研究において徐々に明らかにしていきたい。

参考文献

- 岩岡登代子（2002）「連濁と日本語」『文学』3-4 岩
波書店
- 金田一春彦（1976）「連濁の解」『Sophia Linguistica』
2
- 窪蘭晴夫（1995）『語形成と音韻構造』くろしお出版
- 佐藤大和（1989）「複合語におけるアクセント規則と
連濁規則」杉藤美代子（編）『日本語の音声・音韻
（上）』明治書院
- 鈴木豊（2012）「4拍語を後部成素とする複合語の連
濁について」『文京学院大学外国語学部文京学院短
期大学紀要』11
- 鈴木豊（2015）「ライマンの法則の例外について：連
濁形「-バシゴ（梯子）」を後部成素とする複合語
を中心に」『文京学院大学外国語学部文京学院短期
大学紀要』4
- 中川芳雄（1966）「連濁・連清（仮称）の系譜」『国語
国文』35-6
- 平野尊識（1974）「連濁の規則性と起源」『文學研究』
71
- 村山七郎（1954）「連濁について」『言語研究』25
- 屋名池誠（1991）「〈ライマン氏の連濁論〉原論文とそ
の著者について」『百舌鳥国文』11
- 山村仁朗（2019）「「トリ（鳥）」の連濁現象：「-ト
リ」か「-ドリ」か」『類型学研究』5
- 呂建輝（2018）「「～本（ホン）」の連濁について：現
代語を中心に」『西日本国語国文学』5
- Yukio Otsu (1980) Some Aspects of Rendaku in
Japanese and Related Problems, *MIT Working
Papers in Linguistics: Theoretical Issues in
Japanese Linguistics 2*

『NHK日本語発音アクセント辞典』（1998）NHK放送
文化研究所編

「少納言KOTONOHA現代日本語書き言葉均衡コーパ
ス」

<http://www.kotonoha.gr.jp/shonagon/>

付記

本稿は科学研究費補助金（若手研究，課題番号
19K13207）による研究成果の一部です。

¹ 「ドル為替」「円為替」「外国為替」は清音形と濁
音形両方ある。